長岡技術科学大学
Nagaoka University of Technology

UD
NAGAOKA UNIVERSITY OF TECHNOLOGY
PROJECT

はじめての集中講義物語

2

上村 靖司
Seiji Kamimura

GIGAKUPress

UDプロジェクト

はじめての集中講義物語2

長岡技術科学大学
Nagaoka University of Technology

GIGAKU Press

もくじ

プロローグ 04
第1章 この授業ならわかります 06
第2章 きみぃ、困るよ 13
第3章 幼稚園児レベル？ 19
第4章 事前研修から見えてきた 27
第5章 グレーゾーンの言葉が難しい 34
第6章 日本人、しっかりしろ！ 40
エピローグ 46
付録 TIPS集 51
あとがき 58

プロローグ

「あれからもう6年か…」

集中講義に行ってきて、といわれ、初めてベトナムに出かけてから丸6年。最初に教えた1期生と2期生は、日本に留学し学部で卒業した子もいれば、大学院に進んだ子もいる。

大学院に進んだ1期生の一人は修士課程も無事終え、もう社会人だ。

心配はしたけれど、なんとか大学の授業にもついていけたということかな。

「すごく、手間ひまがかかって、大変でしたよ！」と、苦情をいう先生もいたけど、別の意味で手間ひまがかかる日本人学生だって、いくらでもいるんだから、まあ上出来だろう。

ただ、残念なのは、ときどき聞こえてくる留年の知らせ。お金のこともあって留学生の留年は本当に大変。厳しいだろうけどなんとかやり遂げてほしい。

PROLOGUE

この6年間に変わったことといえば、ツイニングプログラムがあちこちに伝染したことだ。ベトナムだけでも、ハノイの他にダナン、ホーチミン。さらに太平洋の反対側に行って、メキシコのヌエボレオン州の2大学。再びアジアに戻って、中国鄭州。

「ツイニングといえばハノイ」だったのが嘘のようだ。

ということは、ツイニングに関わる人も増えたということで、集中講義に行く先生もどんどん増えている。

6年前の私と同じ不安を抱えながらも、同じように感動を経験して帰ってくるんだろうなぁ。

でも、いちから同じ苦労をする必要もないはず。せっかく積み上げてきた経験を他の人にも伝えることができたら、もっとスムーズに、より良い教育ができて、学生ももっと自信をもって留学してきてくれるだろう。

そうだ。なんとか、みんなにこの経験を伝えよう。

第1章　この授業ならわかります

「おっ、おかえり木山くん。ベトナムどうだった？」

3月。インターンシップに行っていた学生が大学に戻ってくる時期だ。

私の大学には、半年近い長期インターンシップ制度がある。

まだ世の中にインターンシップなる制度のなかった30年以上も前から始まったもので、「実務訓練」という名前がついている。

普通は日本の企業に行って実習するのだが、十数年前から海外の研修先も選べるようになった。欧米もいくつかはあるが、ほとんどは東南アジアの企業。日系企業の工場の進出先が多い。

木山くんは、学部の4年生のとき、私の研究室の一員だった。

実務訓練先を選ぶにあたって、「海外に行きたい！」と「将来先生になりたい！」という2つの理由で、彼はベトナムでの研修を選んだ。

研修先は、ハノイエ科大学。研修内容はTA。つまり、ちょっと長めの教育実習だ。

「で、木山くん、ハノイはどうだった？」

「9月初めに人生初の飛行機に乗ってベトナム・ハノイへ。語学研修を1ヶ月受け、それからTA業務でした。

最初は本当にカルチャーショックの連続でした。

町にはイナゴの大群のようなオートバイの群れ。道ばたには至る所に屋台。ほこりっぽくてクラクションがうるさい中で食べ物を売っている。ふと見るとすぐ脇の歩道ではバイクの修理をしているし、体重計を引っ張って歩いているおばちゃんもいる。

一台のバイクに一家5人乗せている人もいれば、スクーターの足元に豚が寝そべっていることもあるし、家具をしょって走るバイクもある。日本では絶対に見られない光景でした」

「最初はイヤでしたけど、屋台での食事にもすぐ慣れました。ゴミだらけで、ほこりっぽく不潔で、おなか壊しそうで辛かったけど、でも慣れてしまえば、食べ物はおいしいですね。何より安い。学生には優しい値段です。

オートバイの洪水をぬって、すいすいと道路もわたれるようになったし、バイクタクシー（セオムという）のおじちゃんと交渉して値切れるようにもなりましたよ。

アパートに出没するヤモリにはまいりましたが、それ以外

はずいぶん慣れて楽しめるようになりました」

「授業もしたの？」

「はい。結構しっかりとやらせてもらいました。特に日本留学試験対策で、数学とか物理とか教えてきました」

「そうか…。あ、そうだ。集中講義でS教授も行ったよね」

「はい。サポートとしてずっと授業聞かせてもらいました」

「どんな感じだった？」

「すごくわかりやすかったです」

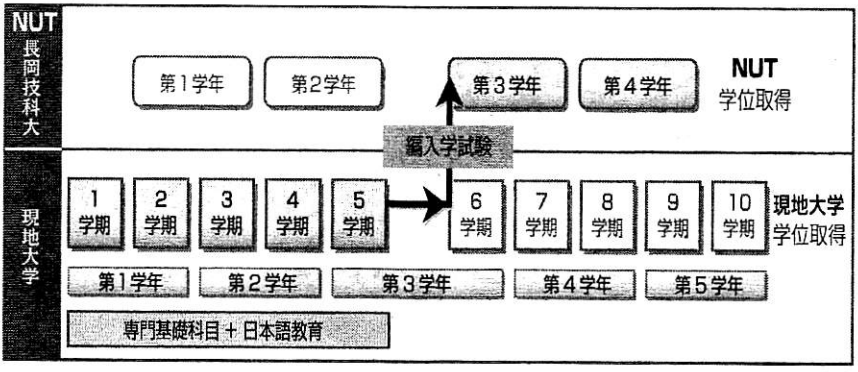
木山くんがTAをやってくれたのは、「ツイニングプログラム」といって、日本留学のための特別なプログラムだ。ベトナムで2年半、普通の大学の授業を受けながら、日本語も勉強する。

朝から晩まで授業、授業、授業で、本当に学生は大変。

でも、しっかり勉強すれば、日本の大学生と同じように、20歳で大学3年生に編入できる。

現地では専属の日本語教師が日本語を教えているのだけれど、日本語の先生は専門科目は教えられない。

だからときどき日本から教授がやってきて専門科目を教える。



とはいえ、日本の教授は超多忙なので、3日とか5日とか短期間集中の講義だ。日本の学生は週1回の授業でも辛そうにしているのに、1日に3コマも4コマもやられたら大変だ。

大学の授業は進みが速い。先生方は、板書も喋りも速いし、難しい言葉ばっかり。学生たちはついていけたのかな。

S教授は、もうすぐ還暦というベテランの流体の先生だ。

1月に集中講義に行ってもらい、水力学の授業をしてもらった。

水力学といえば、機械工学の基礎中の基礎の科目。にもかかわらず、ほとんどの学生が苦手、という難関の一つ。

S教授は、お世辞抜きにすごく教育熱心な先生で、

「学生が出来が悪いとか言ってはイカン。彼らは『教えがい』のある生徒なのだ」

とつねづね言っている。

でも、「授業中の冗談が全く通じない」といつもぼやいている。

「先生、しょうがないですよ。今どきの学生の笑いの感性と、先生の時代の笑いの感性はまるっきり違いますから」

「木山くん、ベトナムの学生たちは、水力学、ちゃんと理解できて

たかなぁ」

「大丈夫ですよ。良くわかっていたと思います。S教授も、学生がわかっているかどうかずいぶん気をつかってくれましたから」

「そうか。それは良かった」

「何より、僕が良く理解できましたよ。水力学」

「なに!?」

「実は、水力学苦手だったんです。でも今回の授業は本当にわかりやすかった。去年受講した、S教授の流体力学はさんざんでしたけど」

「…」

あれ？　もしかすると、彼の言う通りかもしれない。

大学の先生は、概して授業は下手。教育者としての訓練を受けていないのだからしょうがない。

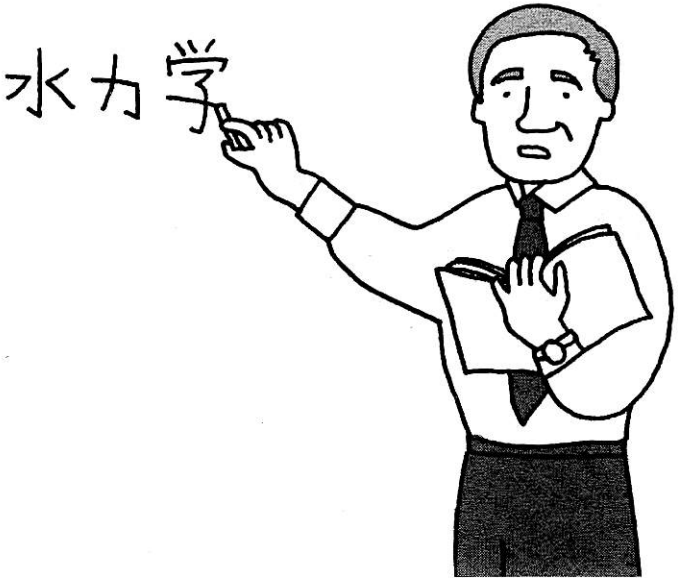
マイペースで、言葉も過剰に難しいし、板書も適当。

授業の進みも速いし喋りも速い。

それが、日本語学習途上の外国人相手となると、ずいぶん勝手が違う。

しゃべりが速すぎれば当然聞き取れないし、言葉も選ばないと通じない言葉だらけ。

板書も丁寧にしないと、特に漢字はノートに書き写すこともできない。



日本語教師ではないのだから、どの程度易しく話して、どれぐらいの速さで、どんな言葉を使えば良いのか、全くわからなくてもしょうがないといえばしょうがないこと。

「私の言っていることはわかりますか?」

と、頻繁に学生たちの理解度を確認しなくてはならない。

なるほど。最近はやりのＦＤ（ファカルティ・ディヴェロップメント）のエッセンスが全て入っている。

「板書は、黒板というキャンバスに内容を的確に配置して、丁寧に書く」

「話すときは学生の方を向いて、話しかけるように明瞭に」

「常に理解度を確認しながら授業をすすめること」

などなど。

単に日本語学習途上の外国人を相手にするだけで、自動的に無意識のうちに先生方が授業改善に取り組む。

これって、もしかして「ＦＤ」そのものなんじゃないの?

教師の教師力を高める「道場」みたいなものなんじゃないだろうか。

こんなことに、私が集中講義に行った6年前に気がついたのだった。

それは私だけの体験ではなかった。授業スタイルのある程度固まってしまったベテラン教授ですら、こういう場に放りこまれれば、否応なしにＦＤ

されてしまう。

これは使わない手はない。どんどん先生方を送り込むべきだ！

木山くん、ありがとう。

君のおかげで、「大学の先生のしごき方」が見えてきた。

第2章　きみぃ、困るよ

「集中講義のことを教えてもらえませんか」

土木工学科のI先生から一本のメールが入った。

土木工学科が進めているベトナム・ダナン大学とのツイニングプログラムが動き出し、いよいよ集中講義が始まるとのこと。

その第1弾として、I先生に白羽の矢が立ったらしい。

I先生といえば、なかなかのデップチャイ。デップチャイ（dẹp trai）というのは「ハンサム」という意味。当然、男性に使う褒め言葉。

女性に使うときには、シンクア（xinh qua）とかデップクア（dẹp qua）という。シンクアはかわいいですね、デップクアならきれいですね。

ふざけてるって叱られるかもしれないけど、こういう言葉をちょっと知っていると、場が和んでコミュニケーションがスムーズになる。言われた方は少なくとも悪い気持ちにはならないからね。

授業中でも、男の子に「デップチャイですね」っていうと、はにかんでかわいらしい。

さて、ー先生の話。

「集中講義で何をどんな風に教えたらいいのかさっぱりわからないのでアドバイスしてほしいんです」

「そうですか…。実は、私も突然行ってこいといわれて、悩みながらなんとなくやってきただけなので、何をどうアドバイスしていいかよくわからないんです」

「…」

「とりあえず、私が使った教材と、向こうで撮ってきた授業風景の写真をお渡しします。参考になれば良いのですが…」

2週間ぐらい経っただろうか。食堂でー先生の姿を見かけた。

「ー先生。おかえりなさい」

「あー、その節はお世話になりました。なんとか無事終わりました」

「どうでしたか?」

「えーまー、なんとか…。楽しかったですよ」

「そうですか。お疲れ様でした」

通り一遍の挨拶。ろくなアドバイスもできず、教材を渡しただけだったから、気にはなっていたんだけど。ホントのところどうだったんだろう?

数日後。

「きみぃ、困るよ。もっとちゃんと教えてくれないと」
「え？」
土木工学科のM教授。ダナンプログラムの責任者だ。
私の学位論文の審査をしていただいた恩師の一人でもあり、前からよく知っている。
「機械工学科は、何年も前からツイニングプログラムを始めていて、ノウハウも蓄積されているんだから、もっとしっかりと受け継いでくれないと困るよ」
「…はい。申し訳ありません…」
ノウハウって言われても、ただなんとなく、悩みながら進めてきただけで、こうやったらいいですよとか、こういうところに気をつけてくださいね、とか、胸を張って言えるほどまとまったノウハウなんてどこにもない。
けれど、考えてみれば、M教授の言うとおりだ。
ただ漫然と集中講義しているだけではダメで、これからもっと他の先生にも行ってもらわなくてはならないし、他の国にもツイニングプログラムは拡がっているわけで、この経験の蓄積は活かさなくてはならない。新たに行く先生方が、一から同じ苦労をする必要はないわけだし、違う人の経験もそこに加えていけば、さらにプログラムは充実するはずだ。
とはいえ、「自分ができる」ということと「それを人に教えることができる」

ということの間には大きな壁がある。
むむむ。これは大仕事だ。しかしなんとかしなくては。

２００８年４月、教務担当の副学長からメールが送られてきた。
「文部科学省で質の高い大学教育推進プログラムの公募が始まった。申請準備を進めるように」との指令。
３年間で６千万円近いビッグプロジェクトだ。
「質の高い大学教育」か…。私たちの大学で取り組み始めたツイニングプログラムは、それ自体は悪くない。けれども、単にプログラムを上手に運営します、という筋書きでは文科省の思惑とは一致しないだろう。

「質の高い」…。まてよ、集中講義そのものがＦＤに効果的というのは立証済み。これをなんとか仕組みとして仕上げられないだろうか。例えば、集中講義に行く前に研修をして、戻ってきてからフォローアップ研修をすれば良さそうだ。
そうなると、研修用のテキストとかあるといいよな。
そうだ、集中講義の「指南書」をつくろう。

それと…あ、集中講義に行ったとき、日本で使っている教科書をそのまま持っていったんだけど、改めて読み直してみると、結構難解な表現が多くて

教えにくかった。専門の教科書も、もう少し易しい表現に書き換えられないかなぁ。

易しい日本語といってもあんまり幼稚な文章だと、大学の先生は嫌がるだろうなぁ。「難しすぎない」ぐらいがいいだろう。つまり過剰にナンカイにせず、普通に通じる日本語で書いてくださいってこと。「平易な日本語」ということでPlain Japaneseと呼ぶことにしよう。P-だ。よし、P-教科書シリーズを出そう。

そういえば日本語の教科書にも理系の語彙、入れられないかなぁ。偏見かも知れないけれど、日本語の先生というのは理系が苦手だから文系を選んだ人たちだと思う。だって僕ら理系は文系が苦手で理系を選んだのだから（偏見ですね。きっと）。

つまり、日本語の先生が教えるのは基本的に文系の日本語であって、教科書のほとんども文系の先生が作っている。

学生は理系の学生で、でも日本語という語学も習得しないといけない。さらに、理系の専門を日本語で理解できるようにならなくてはいけない。

ただでさえ、2年半の前期教育で日本語教育に使える時間は限られているのだから、どんな分野の学部にでも入れるような汎用性の高い日本語を教えるよりは、工学に特化した日本語教育をしてほしい。そうなるとそのための

カリキュラムも教材も必要になってくる。

ふむふむ。だいたいやることが見えてきたぞ。

①集中講義を活用するＦＤプログラム
②Ｐ－で書かれた工学教科書
③工学を学ぶ留学生のための日本語教科書
④ツイニングプログラムにマッチした日本語教育体系

こんな感じかな。

ＦＤというのは教員の教員としての能力改善だ。学生を教えながら先生も学ぶ。教員も学生も共に育つ「共育」だ。

そして、日本語の教員と専門の教員がガッチリとタッグを組んで教育を考え実践する「協育」だ。

よし、コンセプトはこれで行こう。

新鮮味もあってユニークな申請書がかけそうだ。

※２００８年５月末に申請した結果は、８月のヒアリングを経て採択していただきました。そのおかげで、この冊子ができました。

第3章　幼稚園児レベル？

日本語中級相当の教科書を作り始めた。

８００文字くらいのトピックを専門の先生に執筆してもらい、そこから語彙や文法を抜き出して、教材として仕上げるというもの。

機械工学の基礎の代表ということで、工業力学、水力学、熱力学、材料学、機械工作法、５科目を選んだ。

それぞれ同僚の先生方にお願いをして、４つずつトピックを執筆してもらった。

「教科書じゃないですから、おもしろおかしく書いてくださいね。数式とか極力なしにしてください」

筆の速い人、遅い人、とにかくお尻に火がつかないと執筆をはじめてくれない人、いろいろいたが、思ったよりも早く原稿が出そろった。

●工業力学
どっしりと動かない圧縮力
燃費の良いクルマ

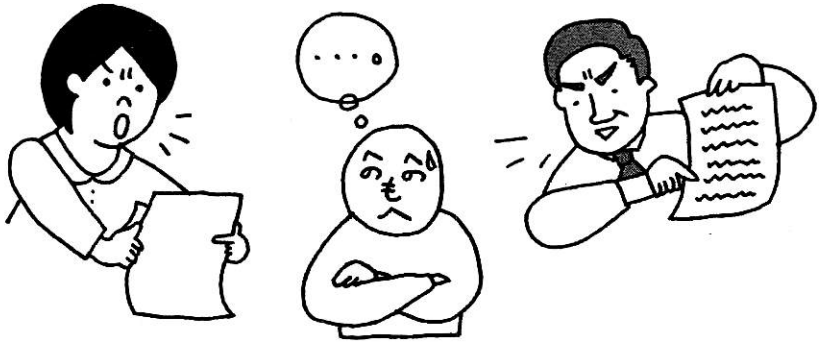
バランスの良いトンボ
慣性モーメントの話
●材料学
硬くてきれいなアルミナの話
人類の進歩を支えた金属～鉄鋼～
材料の素顔を知る
新しい金属材料、マグネシウム
●機械工作
ものを切る
部品と部品をつなぐ
大量に安くつくる
切れないものを切る
●水力学
ユーレカ！（アルキメデスの原理）
永久（アルキメデス）機関
鳥のように、スーパーマンのように
危機の十一分
ゴジラ映画の迫力
●熱力学
熱効率対決！　エンジンVSやかん

すべてエネルギーは熱に変わる
馬力をワットに変えた男
1メートルの温度計といっしょの新婚旅行

見出しだけでもちょっと面白そう。
しかし、先生方から原稿が出てきてからが一苦労。

書いたのは専門の先生。使うのは日本語の先生。
日本語の先生が理解できない限り、教材としては使えない。だから、日本語の先生が腑に落ちるまで、教材を磨きあげなくてはならない。
いきなり日本語の先生に「直してくださーい」と送ってみたら、「△△はどういう意味ですか？　○○はどういう意味ですか。これは？　これは？○×△…」と質問攻め。
しょうがないので、私が間に入って編集することに。
手順としてはこういうこと。

① 執筆者（専門の先生）が8００字のトピック執筆
② 編集者（私）が、わかりやすくなるように編集
③ 日本語の先生が、さらにわかりやすくリライト
④ 編集者を介して執筆者にリライトの結果を確認してもらう。



⑤関係者の皆が納得するまで①～④をくりかえす。

簡単そうにみえるが、実は編集は大変。大学の専門の先生が執筆する思いっきり専門の内容を、日本語の先生が理解できるようにするには、たぶん中学生か高校生でも理解できるレベルにしなくてはならない。

専門の先生はそんなことしたことないわけで、第一次フィルターとなる私のところで相当直さなくてはならない。

場合によっては、先輩教授にダメ出ししなくてはならない。

「このまえ送った原稿はどうなった?」

「(このまえって、きのうじゃん…) えっと、いま修正してます…」

残念なことに、S教授はせっかくワープロで打った内容を印刷して僕にくれる。メール添付してくれたらいいのに。

しょうがない。打ち直そう。

「先生、私の方で少し直させてもらいました。ご確認お願いします」

「うむ」

翌日さっそく、鉛筆でびっしりと修正が書き込まれたゲラが、私のポスト

に入っている。むむむ。せっかくわかりやすく直したはずが、また難解に戻っている。

お昼休みの談話室で、S先生と。

『いま、物体が占める部分を静止している水で置き換えたとすれば、この部分に働く圧力は物体に作用するものと同じである。したがって、物体に作用する浮力はその物体が排除している水に作用する重力と大きさが等しく向きが反対である』

「ここは、たぶん日本語の先生にはさっぱりわからないと思いますよ」

「しかし、これはそういう意味であって、これ以上書き換えようがないじゃないか」

「おっしゃることはよくわかります。でも、この教科書は水力学の教科書ではなくて、日本語の教科書なんです。先生が使うんじゃなくて日本語の先生が使うんです！」

「うむ。それはそうだ」

「ということで例えばこんな感じではどうですか？」

『この物体と同じ形・大きさで、水で満たされたゴム風船を考える。水で満たされたゴム風船は、浮きも沈みもしないので、ゴム風船に働く重力と、周囲の水から受ける圧力の合力はつり合っている（向きが反対で等しい）』

（これでもまだ相当難しいと思うけど…。）

「ゴム風船の質量は無視できる、と書かなければ正しくないではないか」

「そこまで書くといよいよわからなくなりますよ」

「大体、余計な例え話を持ち込むのはけしからん」

「まあまあ、そうおっしゃらずに。イメージできないと理解できませんよ」

万事こんな調子。

しかし理系の文章は本当に、禅問答えみたい。

論理が破綻しないように、用語も定義に厳密に使いこなし、さらに同じ表現を使うと格調が低くなるからと、言い回しを変えたりする。もっというと、難しい言葉を使った方が格調高いという思いこみがあるし、下手をするとやたら説教がましい文章だったりする。

専門用語だって、普通の人にはさっぱり理解できないものばかり。まあ、学問だから厳密さや論理を無視するわけにはいかないのだが。

そうこういいつつも、なんとかかんとか、私とS教授との第1段階はクリア。それを日本語の先生に送る。そうすると日本語の先生が、学生の習っている文法とか語彙とかを考えながら、リライトしてくる。意味がわからないと問い合わせがくるし、「こう直してもいいですか?」と聞いてくる場合もある。

ようやく仕上がったリライトが私のところに再び戻ると、また胃が痛くなる。

「あー、こんなに劇的に直されてしまった文章を、またS教授に見せるのか…」

見せないわけにもいかないので、勇気を振り絞って教授室へ。

「先生、リライトが戻ってきました。確認お願いします」

「うむ」

翌日。再び私のメールボックスに、鉛筆でびっしりと書き込まれた紙が。とほほ…。「ふりだしに戻る」。すごろくとかモノポリーで、そんなのあったなぁ。

「先生、これは水力学の教科書でなくて日本語の教科書です！」

「うむ。わかっている」

「ですから、日本語の先生の意見を尊重しましょう」

「まぁ、趣旨は理解しているから、君の良いようにしたまえ。しかし、中学生向けに書いた文章を幼稚園児向けに直されたみたいだ」

実をいうと、S教授にお願いしたのは4トピックだけ。

ところがS教授は7トピックも書いてくださった。非常に協力的な良い先

生なのだ。

でも、2トピックは泣く泣くボツにさせてもらった。だって、教科書そのものなんだもの。すみません。

それでも途中から乗ってきたS教授は、スーパーマン、ゴジラとなかなか面白いネタを書いてくださった。

最後に、リライトが終わって最終のチェックをしてもらったときのエピソードを。

二宮忠八という人が、ライト兄弟の十年も前に「飛行器」を製作したとのこと。それを、当時の偉い人が理解できず世界初の飛行機がメイドインジャパンにならなかったという逸話。

幼稚園児並みの幼稚な文章に我慢できなくなったS教授、最後の最後に一文追加し鬱憤を晴らした。

「十年後にライト兄弟に名をなさしめたことは誠に残念です」

第4章　事前研修から見えてきた

集中講義に行く前の事前研修が、恒例行事になってきた。

どのプログラムも、集中講義に出かける前には、「事前研修お願いしマース」と、私のところに連絡がくるようになった。

普通、模擬授業とか公開授業とか、主催者が先生にお願いして（イヤな顔をされながら）やってもらうんだけど、この事前研修だけは逆。こちらがお願いされる。しかも、終わると「ありがとうございました」と言ってもらえる。それだけでも、すごいＦＤだ。

事前研修で何をやるかというと、実に簡単。１５分から２０分程度の模擬授業をやってもらい、そのあとに意見交換をするだけ。

参加するのは、日本語の先生と集中講義の経験のある先生（つまり私）。

それに、なるべく留学生に声をかけて参加してもらう。実際に集中講義を経験した留学生の率直な意見が一番説得力がある。

さて、模擬授業に出てくれた留学生Ａｎｈさんのコメント。

「先生、この授業だと学生は良くわからないと思います」

うわ、いきなり厳しいコメント。でも、この洗礼はいまのうちに受けてお

いた方がいい。集中講義に行ってからだと取り返しがつかない。

これまで、のべ10人以上の事前研修をこなした。考えてみるとすごいことだ。別の大学の先生で受講してくださった方もいる。

こうやって大勢の先生方の授業を見せていただくと、ホントに個性がいろいろ見えて面白い。

体系的に整理するのは無理だけど、ちょっと分類してみたい。

（1）テキパキパワポ派

最近の大学の先生は、このタイプが多い。パワーポイントでしっかりと作り込んでくる。言ってみれば学会発表の15分を6回分ぐらいまとめた感じ。

確かに、パワーポイントで作り込んでくると話しやすいし、それを印刷して学生に渡せば、授業の資料としても悪くない。多少先生の話がわかりにくくても、印刷物を見れば、学生としてはテスト対策もしやすい。

しかし、スクリーンを「見せて」、先生が「しゃべる」。そうすると学生は、「見て」「聞く」ことになる。

そもそもこの集中講義は科目の「内容」を教えるだけの授業ではなかったはず。もちろん、専門の先生は日本語教師ではないのだけれど、「日本語」を使って「専門科目」を「読む・聞く・書く・話す」ことを経験させなくちゃ

いけないのだと思う。ところがスクリーンと同じ資料をもらえれば、「書く」必要は全くないし、先生の話を聞くだけなら「話す」場面もない。

テキパキパワポ派の講義だと、「読む」と「聞く」しかトレーニングできてないことになってしまう。

やっぱり板書してほしい。

そうでないなら、例えば、資料をところどころ「虫食い」にして「穴埋め」させてほしい。難しい漢字を書かせてほしい。手を動かしてくりかえし書くことで、自然に専門用語が読み書きできるようになるんじゃないかな。

それと、一緒に読むとか学生に読ませるとか、そういう時間も作ってほしい。声に出すってすごく大切なことだと思う。

頭の中だけで単語が読めることと、実際にそれを声に出すことって違う。これって、これまで僕らが何年も英語を学んでも話せるようになっていないってことで証明されている気がする。

（2）モクモク板書派

いきなり板書を始める人もいる。絶滅危惧種かもしれないが確かにまだ生息している。このタイプを僕は嫌いではない。モクモクと先生が書く板書を、意味がわからなくてもいいから、モクモクとノートに書き写す。写経みたいなもんだ。それも悪くない。

でも、導入、アイスブレークはしてほしい。まずはなんといっても自己紹介だ。自分のこと、大学のこと、好きなこと。なんでもいい。お笑いの世界で言えば、「ツカミ」だ。

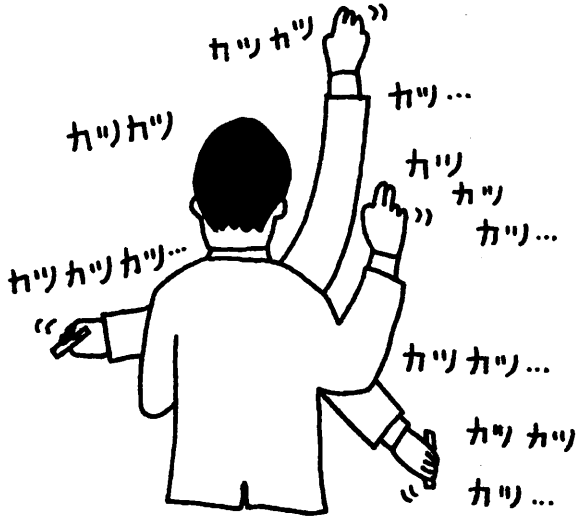
下の名前が「勝男」という先生、「僕の名前はwin manだ！」と自己紹介して、スタートからしっかりと笑いをとっていた。これなら「ツカミはOK」だ。

板書も、できればレイアウトを意識してほしい。

書き始めて、一通り板書して、解説を始めながら、付け加えたいことを空いているスペースを探して書きだす。空いているところが都合よくあるはずなどなく、アッチに書き、コッチに書きしているうちに、完全に迷子になる。

しまいに、解説している大事な部分を消して、そこに追加情報を書き込んだりすると、完全に地図を失って航海することになる。こういう板書は避けたい。

それと板書を書き写す時間も取ってほしい。漢字を書くって、私たちが思っている以上に大変なこと。だから、様子を見ながら、書き写す時間も与える。全然書き終わらないうちに消されると、もうお手上げ。その授業の残りの時間は、完全に「もう、ムリ！」という感じになる。



（3）ガンガンシャベリ派

シャベリの得意な先生も多い。それはそれでいい。でも、シャベリ能力が発達した理由があるはずだ。

例えば、板書が苦手とか。

私も実は、書くのはちょっと恥ずかしい。なんといっても字が汚い。漢字の書き順が怪しい。書けない漢字も多い。

大学の先生って、えてしてプライドだけは空よりも高くて、できないことは海よりも深く沈めてしまいたいと思っているひとが多い。

かくいう自分もそのクチだ。

でも、「話す」ばっかりでは、学生は「読む・書く」「聞く・話す」のうちの「聞く」しかできなくなる。もちろん場面によっては、聞くだけで理解しなくちゃならないこともあっていい。でも、授業の大部分が、理解できない内容をただ聞くというだけでは、ストレスがたまる。

理解できない外国語は、ノイズにしか聞こえないから。

バランス良く、「読む・書く」「聞く・話す」を刺激してほしい。

「先生、それでは簡単すぎると思います」

お、また留学生の右ストレート炸裂。やっぱり初めてのことだから、勘違いが多い。

例えば、

●過剰にゆっくり話す
●全部の漢字にふりがなをふる
●内容まで小学生レベルに落とす
●日本語の授業を始める
●苦しくなると英語に頼る

日本語学習途上ですよって釘を刺してあるから気を遣いすぎる。そうすると、過剰にゆっくりと話してしまい、

「先生、もっと速くても大丈夫です」

と指摘される。「ゆっくり」よりは、「はっきり」が大事だ。

ふりがなも、WORDの機能を使えばお手軽に全部に振れちゃうんだけど、ふりがなは初出のときだけで十分。

だって、2回目からは「これなんだっけ?」って考えてほしいし、何度か「なんだっけ?」って思ううちに覚えるはずだから。

「易しくしてくださいね」という釘が効き過ぎると、内容まで小学生レベ

ルに落としちゃうことがある。

それじゃダメ。むしろ、日本の最先端の技術とか、そういう話を聞きたがっている。だって、理系の素養も理系の感性ももっていて、日本に憧れをもっているんだから。大いに先生方の魅力的な研究の話や最新の製品にぎっしり詰まった日本の最先端技術の話をしてください。

絶対その方が、彼らは目をキラキラさせるはず。

日本語を教えてほしいというのが効き過ぎると、日本語の授業を始めちゃう先生もいる。日本語の授業は日本語の先生にまかせましょう。

日本語で専門科目を教えてください！

あ、そうそう、日本人は、ガイジンを見るとすぐ英語に頼っちゃう。相手がベトナム人でも、日本語が通じないとすぐに英語に頼る。英語ならガイジンには通じるはず、という思いこみは誤解です。

事前研修にまつわる注意点はつきませんが、とりえずこれぐらいで。

第5章　グレーゾーンの言葉が難しい

ベテラン教授の集中講義のサポートで、教室に入らせてもらった。今日が初日。先生も生徒もちょっと緊張気味。

「私の話は速すぎますか？」

「だいじょぶで～す」

いいえ、全然。丁寧すぎるくらいですよ。と言いたいところをグッとこらえて、おとなしく見ている。

事前研修で、

「パワーポイントだけだと、どうしてもペースが速くなっちゃうし、学生が板書する必要がなくなるので、文字を書く訓練にならないんです。できれば板書と組み合わせてください」

と指摘されてたから、工夫してプロジェクタとホワイトボード両方を組み合わせてくださっている。

しかし、大教室を真ん中で半分に区切った細長い教室だから、スクリーンを下ろすとホワイトボードが使えない。悩んだ末に、横の壁にパワポを投影し、正面にホワイトボードがくるようにしている。

正直にいうと、教授法としては中の中くらい。下手でもないし上手でもない。でも、すごく一生懸命で、その熱意が学生にも伝わる。やっぱり、授業って上手下手より、人間性だよね。

自分が面白いと思うことを熱っぽく話したら、学生だって面白いと感じる。教育学の先生が言っていた。

「面白いと思ったことは誰かに話したくなるものなんです」って。

確かに「面白い！」は伝染する。

逆に、なんとやく「やっつけ仕事」っていう雰囲気で、淡々と授業をやられたんでは、いかに板書がきれいで、話が上手でも冷めちゃうよなぁ。

さて、授業に戻ってと。材料のお話が継続中。

プラズマ…ナノ…マイクロ波…うなずいているのは、日本で修士号をとったＴｕ　Ａｎｈだけだ。ツイニング一期生でこのたび無事修士課程を修了した彼女がＴＡをしてくれている。

改めて考えてみると、カタカナ語が多い。外来語とかその造語だけど、明らかに専門用語ならそれは専門用語として教えるからいい。

けれど、専門用語とも一般用語ともいえない中間の言葉がいっぱいある。グレーゾーンだね。これがやっかいだ。

先生はもってきたアルミニウムの結晶のサンプルを見せながら、

「結晶はわかりますか？　構造はわかりますか？　規則的はわかりますか？」

と問いかけている。

配布資料の文章をみると「金属の原子が規則的に並んで結晶を作る。その代表的な構造として、体心立方、面心立方、六方晶がある」とある。

これを分解してみる。専門用語と言えるのは、「金属」「原子」「結晶」「体心立方」「面心立方」「六方晶」。結構多い。

でも、「金属」「原子」「結晶」は高校までで絶対に習っているはずで、大学の授業では解説しないだろう。

次に、「規則的」「代表的」「構造」は専門用語とは言えない。

でも、「規則」ではなく「規則的」というと、「一定間隔で」とか「一定の法則に従って」という意味になるから、日本語の授業で習ってないと理解できないのではないかしら。

「代表的」は代表がわかればわかりそうだな。

問題は「構造」だ。構造、structure。建築分野なら耐震構造とか使うし、化学分野なら分子構造などと使う。

先生は間違いなく「すでに知っているはずの言葉」と認識して、というよ

り意識もせず当たり前のように使うだろう。でも、日本語の先生からみればちょっと難しい言葉かもしれない。いかにも理系っぽい言葉だよね。

そう言えば、「公式」という言葉も意味が変化する。僕らのイメージする公式はFormula。つまり数学とか物理の公式だ。でも日本語のクラスで習うのは、公式行事の公式、Official。むむむ、全然違う言葉もあるということか。

こういうグレーゾーンの言葉って、どこで教えたらいいんだろう？　それに中学、高校レベルの数学や理科の用語も教えておかないと、専門の先生がとっても苦労する。だって大学教授に、「1たす1は2」まで教えてもらうわけにもいかないでしょ。

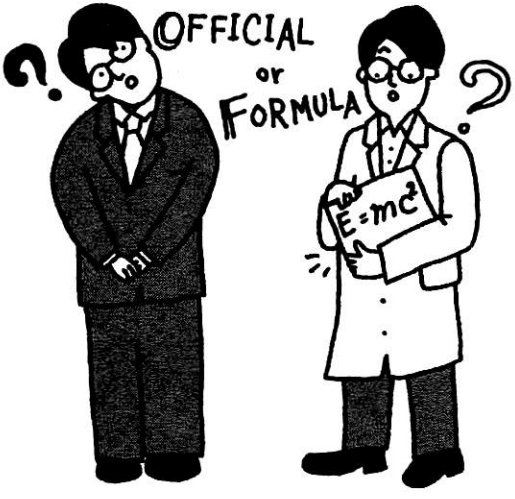
縦割り行政の狭間みたいなものだ。お互いに、「あなたの仕事でしょ！」って押しつけ合ってもしょうがない。

どこかで教えなくちゃ。

そんなこんなで、ワークブック作成プロジェクトがスタートした。狙いは次のとおり。

① 実務訓練生（工学部の4年生）が、集中講義の前段として、教える教材とする。

② 中学校、高校の数学、理科で出てくる言葉を中心に構成する。



③1課を45分授業1回でできる分量にし、30課程度で構成する。
④日本語の練習帳だが、専門用語にスムーズにつながるよう少し難しい単語も導入する。
⑤自習ができるように工夫する。

案外、こういう教材が世の中にない。

実際に実務訓練にこれから行く3人に協力をお願いして、教材を作成している（現在進行中です）。

3人のうち2人はベトナム・ハノイ、もう一人はメキシコ・ヌエボレオンだ。まずは試作し、それを持参して実際に使ってもらいながら仕上げることになる。

出来上がれば、今度は他のツイニングプログラムでも使ってもらえるね。

しかし、よくよく考えると、「日本語学習途上の留学生」といっても段階によって全然レベルが違う。僕ら専門の教員が集中講義を始めるのは、いわゆる初級の授業が終わってから。つまり1年生から2年生になるくらいだ。といってもいきなり専門の先生の集中講義は辛い。だって式の読み方とか図形の名称とか知らないのだから。

そこで、「ワークブック」が必要になるし、それを使って教える実務訓練生が必要になるのだ。

それが終われば、比較的易しい科目を比較的優しい先生に教えてもらうことになる。いままでの経験でいくと、機械工学でいえば工業力学や機械工作が初級向きのようだ。

その後さらに半年、1年と勉強が進めば、もう少し難しい科目を集中講義に入れていって良い。

9月に入学した学生は、2年後の9月には3年生になるわけで、このころになると日本語力も格段に向上している。

そうなれば残りの半年間、日本で先生方が教えている雰囲気に近い感じで授業ができるようになる。

自動車学校でいえば路上教習だね。

しかし、ここまでプログラムがデザインできるまでに8年かかった。新しい教育プログラムを作るって本当に大変だ。

1期生とか2期生とか、大変だっただろう。きっと。よくがんばったと思う。

今がんばっている8期生と、これから勉強を始める9期生には、しっかりと勉強してもらって、なるべく多くの学生が日本に行けるといいなぁ。

来年、8期生は受験だ。ガンバれ！

第6章　日本人、しっかりしろ！

6年前からこうやって手探りで続けてきて、今振り返ると、「教える」ということについて改めて考えさせられる。

教えるというのは、すごく一方的な言葉だと思う。

「先生が学生に情報を与える」ぐらいにしかイメージできない。だから、FDといっても、「明瞭に話す」とか「板書を見やすくする」とか、「伝える技術」ばかりに意識が行っているような気がする。

でも、たぶん「教える」ということは、決して先生から生徒への一方通行ではなく、「教える－学ぶ」が必ずセットになっているはずだ。もっと言えば、「学びたい」という能動的な生徒に「教える」というのが理想だ。だって、学ぶ主体は生徒なのだから。

今年の6月、メキシコからツイニングプログラムのコースで学ぶメキシコ人が夏季研修でやってきた。せっかくの機会だからと、学部2年の工業力学の授業に参加させてみた。

日本人学生約20人の間に10人のメキシコ人学生を座らせ授業開始。

「今日は、慣性モーメントの勉強をしましょう」

慣性モーメントは、回転運動を理解する上でとっても大事な概念。でも物体の直線運動に比べると、回転運動はなかなか理解しづらい。「質量」が大きいと物体を運動させにくいのと同じように、「慣性モーメント」が大きいと回転運動させにくくなるという、そんな概念だ。

「浅田真央ちゃん知ってますか?」

日本人学生は、「はい、知ってまーす」でも、メキシコ人学生は「?.?.?」。フィギュアスケートはメジャーなスポーツじゃないんだね、メキシコでは。

「はい、問題です。フィギュアスケートの選手が、ジャンプの時、腕を広げずに畳んでいるのは何故でしょう?」

日本人学生とメキシコ人学生の混合クラスなんて初めてだけど、集中講義の経験で培った技を駆使して授業だ。

ふりがなをふって、板書もあえて虫食いにして、と。

「この下線を引いた部分の答えはなんですか?」

「…」

あれ? 日本人学生は、誰も手をあげないのに、メキシコ人学生が手をあげてくれた。ちょっと説明がうまくできなくて困っている

けれど、答えはあってる。

一通り、慣性モーメントの解説が終わって、さていよいよ本題。

「真央ちゃんは、どうしてジャンプのとき腕を畳んでいるのでしょうか？　隣同士で話し合ってください」

日本人とメキシコ人を交互に座らせたから、2＋1の3人グループができる。

「はい、それでは説明できる人、手をあげて」

「…」

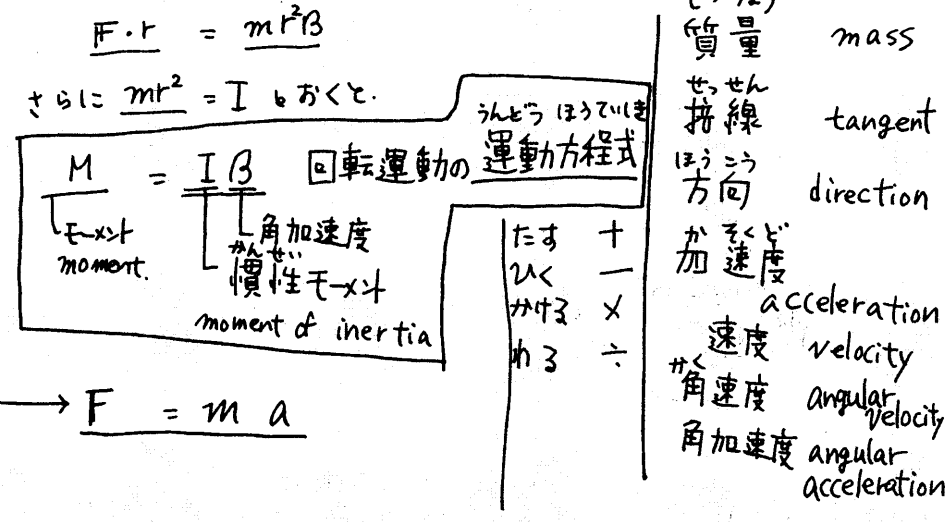
あれ、また日本人学生は誰も手をあげない。手をあげているのはメキシコ人だけ。

「それじゃ、ダニエルくん、答えはなんですか？」

言いたいことを表現するのに苦労してもどかしいけど、言いたいことは伝わってきた。正解だ。やるね。

続いて日本人学生に声をかけて答えさせると、ちょっと怪しいながらなんとか答えられる。けれど、イヤイヤ感がひしひしと伝わってくる。

もー、日本人学生しっかりしろー!!



ベトナムの学生もメキシコの学生も、授業していると、基本的に「学びたい！」という熱い想いがひしひしと伝わってくる。

先生の話を聞こうとする態度がハッキリしているし、問いかければ答えようとする。もちろん全員とは言わないが、日本人学生の反応の悪さと比べたら雲泥の差だ。

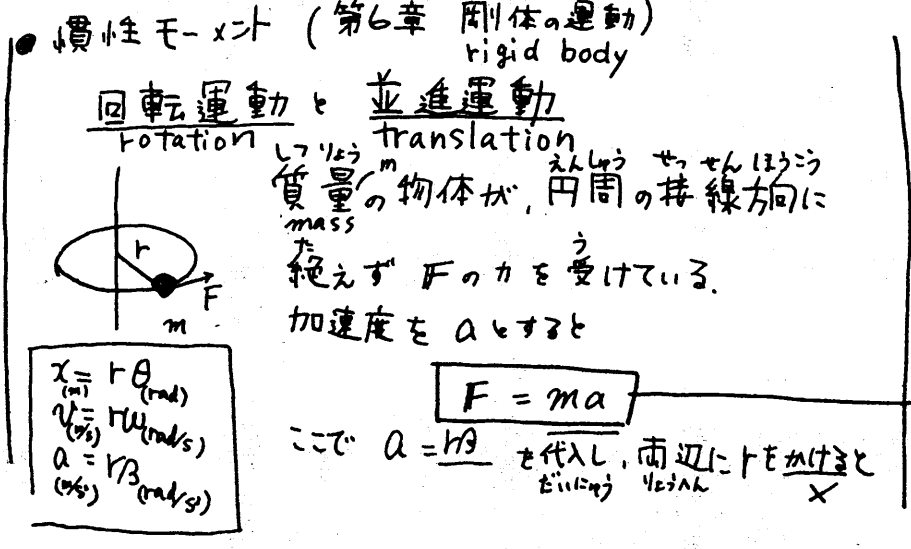
基本的な基礎学力も留学生の方が高そう。なんだかちょっと情けない。

でも、これって「いまどきの学生は…」と簡単に結論づけていいのかしら。

学生のやる気、積極性、基礎学力、不満はたくさんあるけれど、それを全部学生のせいにして良いのかしら。

たぶん学生のせいばかりではない。学生だけが悪いはずがない。

僕たち教師は、彼らが身を乗り出して話を聞きたくなるような魅力的な授業をしてきただろうか。もっと知りたいと思わせるような、彼らの感性を刺激するような良い課題を与えてきただろうか。



一方通行の「教える」だけでは、興味を引かないし、学びたいと思う気持ちを持続させられない。

良い課題を与える。なぜだろう？　答えは何だろうって「知りたい」気持ちを引き出せれば、「学ぶ」準備が整う。

そうなったらしめたもの。ここでも慌てて教えてはいけない。

簡単に答えを与えずに「導く」ことが大切だ。簡単には答えを教えない。それが肝だ。

そうすれば、「あーなるほど」ってなる。これこそが「学び」じゃないだろうか。

「教える」とは「教えない」こと。なんだか詭弁のように思われるかもしれないが、これが真実だと今は思える。

どうしたって、結局学ぶのは学生。

「学生が学ぶ」ことが大事であって、「教師が教える」ことが大事なのではない。

しつこいようだが、「学ぶ」主体は学生だ。

主体を「教師」から「学生」に変えていけば、ほとんどの問題は解決するんじゃないかしら。

最後におまけ。メキシコ人学生に書いてもらったミニッツペーパー（授業最

後の数分間で書いてもらう授業評価票）を見てほしい。
字は汚いし、漢字は書けてない。でも、一生懸命書いている。
このひたむきさ、きっと日本人学生にもいい刺激になったはずだ。

学籍番号		氏名	ウーゴ

問1　今日の講義のポイントは？　疑問は？（合わせて3つ以上）

慣性モーメント
かんせい
inertia
今日は工業力学のクラスでかんせいをべんきょうしました。そのことはきょりとしつりょうとはんけはとてもたいせつです。へんかがをしたらかんせいモーメントもかえます。

問2　今日の講義について	良い	普通	悪い
興味がもてたか	[×]	[ ]	[ ]
内容はわかりやすかったか	[×]	[ ]	[ ]
教師の話し方は聞き取りやすかったか	[×]	[ ]	[ ]
黒板は見やすかったか	[ ]	[×]	[ ]
重要な点を強調していたか	[×]	[ ]	[ ]
参加（質問・発言など）をうながしたか	[×]	[ ]	[ ]

なんでもコメント：わかりやすいです

問3　あなた自身について（10点満点で何点？）

今日の受講態度（ 9 点）	今日の理解度（ 9 点）

エピローグ

言語学の先生と、僕らの取り組みについて意見交換したときのことだ。

「コードスイッチですね」

「コード？　スイッチ？　電気製品ですか？」

「いいえ。例えば、日本語が少しできるアメリカ人と、英語が少しできる日本人が会話しているとき、会話に英語と日本語とが混じることってあるでしょ。そういうのをコードスイッチ（Code Swich）って言うんですよ」

「なるほど。でもそれがＰＩ（プレイン・ジャパニーズ）とどんな関係があるんですか？」

「コードというのはそもそも規則のことなんですよ」

あー、言われてみれば、アメリカの建築基準法をBuilding Codeって呼んでたなぁ。

「人と人とがコミュニケーションするとき、言語という規則に沿って情報伝達を

EPILOGUE

しているのです。言いたいことが相手に伝わるように、規則を変えながら伝達することが、コードスイッチなんです」

「ふむふむ」

「例えば日本語という一つの言語でも、仕事しているときには標準語、家にかえれば方言、というように無意識のうちに言語の規則を切り替えていることありますよね。これも広い意味ではコードスイッチです」

「なるほど！　ということは、日本語学習途上の留学生に話すとき、言葉の規則を『平易な日本語（P－規則）』に切り替えるのも、コードスイッチなんですね！」

「そういうことです」

同僚が、すごく努力をして大学の中に「てくみゅ（テクノミュージアム）」という展示スペースを作った。そこには、大学の教員が開発した技術が展示され、その説明パネルが添えられている。

「先生方が書いた説明文が難しすぎて、一般の人にはなかなかわからないんですよー」

と同僚は嘆いている。

「一般の人でもわかるように書き直しをお願いするんですけど、すごく叱られる

んです」

デジャブーかな。こんなことどこかであったような…。

留学生向けでもいい。大学を見学に来た高校生向けでもいい。学園祭に来た小学生向けでもいい。とにかく、相手が変われば「伝え方」は当然変わるはず。だって言いたいことが伝わらないということは、聞く意味がないということなのだから。

なるほど。『伝える力』(そんな名前の本がベストセラーになっていた)が大事だ。その訓練として、大いに「他流試合」をすればいい。私自身、2年間だけだけど、高専の教員をやった経験はすごく活きている。だって、多感な高校3年生に教えていたのだから。

知識レベル、興味の近い人たちと学会でとことん最新の研究成果を議論する、日本語学習を始めたばかりの学生に力学を教える、一般市民を対象に生涯学習の講座を開く…。場面場面で、「コード」をしっかりと切り替えて伝えられるようになれば、もっともっと教員としての自信もつくだろう。

やっぱり、聞いてくれる人が面白がってくれて、良い反応があれば、話してても

気持ちイイもんね。

「めんどくさいなぁ」と思う場面こそ、「楽しむ」ことが大事だ。

よし、先生方をもっともっと他流試合の修行に出していこう。

（おしまい）

付録　TIPS集

「集中講義」経験者が
あなただけに教える
ワンポイント・アドバイス！

定着のため、事後に単語テストを

集中講義を終えて、「これまでの日本人教員の講義内容を覚えていますか?」と問うと、「覚えていない」という答えが複数返ってきました。3日程度の講義では内容を理解させ身に付けさせることは、容易ではないということでしょう。

そこで、事後に、現地の先生にお願いして復習とテストをしてもらいました(60語程度の語彙を複数回に分けて)。

今回はできませんでしたが、単語テストだけでなく、意味を辞書で調べ、日本語で説明させるレポートを提出させればさらに理解を深められるでしょう。インターネットがつながっていますから、メールで送ってもらいコメントをつけて返すと良いですね。

長岡技科大/電気系　黒木雄一郎

実演は間違いなく受ける!

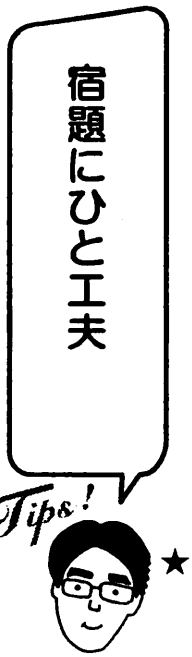
「機械工作法」の講義で、削ったり穴を空けたりの話をしました。学生たちに聞いてみると、工作機械は大学にもあって、実習の授業もあるのだけれど、やっているのを見ているだけで自分では機械に触れないとのこと。

そこで、100円ショップに行って電池で動く電動ドリルや電動ルータ、工具など一式を買い込んで持って行きました。学生たちに渡して実験させると、授業にならないくらい夢中になってくれました。

授業の内容が定着したかどうかはわかりませんが、こういう刺激を与えることはとっても大事だと実感しました。

長岡技科大/機械系　磯部浩巳

宿題にひと工夫



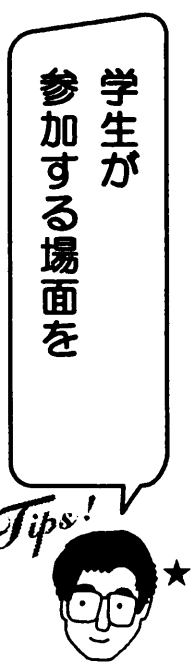
やはり定着させるのが最大の課題です。そこで宿題にひと工夫。

専門レベルとしてはそれほど難しくない宿題を課し、「明日みんなの前で板書して説明してもらいますよ」と付け加えておく。すると、学生たちは、宿題をやるだけではなく、日本語で板書する練習、日本語で説明する練習もしておかなくてはなりません。しかも、みんなの前で一人でやるのですから、良い具合にプレッシャーになります。

これによって、授業の資料を「読む」、先生の説明を「聞く」だけでなく、「書く」「話す」のトレーニングもできます。教員にとっても学生の理解度が一目でわかりますし、「グレーゾーンの言葉」のチェックもできます。

長岡技科大／電気系　菊池崇志

学生が参加する場面を



私が行ったのはメキシコの大学です。ラテン系の国民性でしょうか、学生は授業中、自分で話したいとウズウズしている感じでした。講義中に問いかけて、日本語で答えさせ（まだそれほど上手ではない）、他の学生と一緒に聞いてあげると、本人はとても満足そうでした。講義の後には、学生同士で日本語の間違いを指摘しあったりもしていました。

日本から来た大学の教員と、専門の内容を日本語で話し合ったことが、何よりの刺激になったようです。その後も、何度も手を挙げて質問してくれました。一方的な講義ではなく、学生も参加する場面を作ることが、とても大事だと感じました（日本人の学生では、こういうことはあまりないのが残念です）。

長岡技科大／環境・建設系　高橋修

日本語初級者には長文はプリント配付で

事前研修でも、「なるべく書かせる機会を作ってくださいね」とアドバイスを受けていたため、板書をして、それを書き写す時間をとっていたのですが、一回につき5分くらい待っていなければならず、授業が全く進みません。

日本語の先生からも、「せっかくの集中講義の機会なので、長文はプリント配付で済ませ、板書を書かせるよりは、内容を教えてあげてください」とコメントをいただいたので、途中から軌道修正しました。

対象が、2年生か3年生かで日本語の能力は全く違うので（今回は2年生が対象）、相手のレベルに合わせて、内容を工夫しなければならないことに気づきました。

長岡技科大／電気系　中山忠親

関係性を築くにはまず名前を呼ぶこと

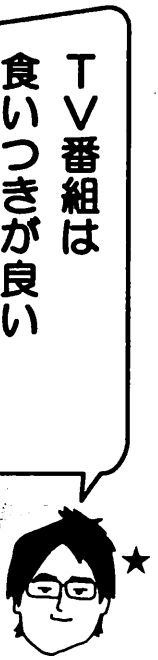
授業は先生から生徒への一方通行では決してありません。人間と人間のコミュニケーションである以上、関係性を築くことがまず第一歩になります。

単純で当たり前のことですが、「名前を呼んで質問する」ことが、学生と教員の距離を縮めるのに一番良いと思います。そのために、名簿は事前に用意しておいてもらいましょう。

外国人の名前は、発音が難しかったり長かったりして、覚えるのは大変ですが、なるべく覚える努力も必要ですよね。写真付きの名簿なら最高です。

長岡技科大／機械系　南口誠

TV番組は食いつきが良い



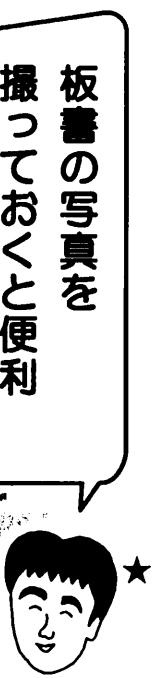
理解しにくい言葉や専門用語の解説には、写真や絵が効果的です。しかし、それよりも圧倒的に興味を引いたのは、DVD映像でした。建設工学に関するDVDを、毎回、授業の最後に鑑賞させました。

字幕付きで見せながら、難しい言葉がでるたびにDVDを止めて解説を加えます。解説を100%理解できなくても、映像でかなりの内容が理解できますし、何よりも彼らの興味のある内容です。やはりプロが編集したものは、飽きさせないように魅力的に構成されています。

もちろん基本は普通の授業形態ですが、長い授業の後半は疲れてきて集中力も落ちますから、リフレッシュも兼ねて使うと良いでしょう。

長岡技科大／環境・建設系　磯部公一

板書の写真を撮っておくと便利



板書を写真として残しておくと、何かと便利です。例えば、

①次回の授業の準備に使える
②欠席した学生に渡す
③小テスト用の穴埋め問題を作るのが簡単
④授業記録として印刷して保管
⑤他の先生への引き継ぎはこれを渡すだけ

などなど。解像度はかなり低くても全く問題ないですよ。

長岡技科大／機械系　上村靖司

眠そうな時は立たせて背伸び

ベトナムでは朝早くから授業があるため、学生たちはよく眠そうにしています。授業中に居眠りをしている学生だけを注意するのでなく、全員で立って背伸びをさせるようにしています。

また、退屈させないために、授業前に教える内容を十分にまとめておき、笑いの取れそうなネタづくりもして、アクティブで面白い授業になるよう心がけています。

長岡技科大／4年生・TA　塚本陵

プリント配付は解説のあとで

授業の最初にプリントを配ると、それをじっと見ていて話を聞かない学生が多いのです。

そこで一計。

解説をし終えてから配布するようにしています。

長岡技科大／4年生・TA　津田塁文

あとがき

海外の大学との国際連携教育は、着実に拡がっています。これは日本に限ったことではありません。先日、マレーシアのある大学でドイツの大学と留学生を交換して、双方で学位を発行しているという事例を聞きました。日本人から見ると、どちらの学生も英語を使いこなせそうなので、コミュニケーションは比較的問題ないように思うのですが、それでも「言語の壁」は大きく横たわっているとのことでした。

「日本語」というのはやはり外国人にとって大きな壁です。本学の国際交流をリードしてきた石崎幸三教授は「日本語そのものも、国際化に伴って進化しなくてはならない」と常々おっしゃっています。本UDプロジェクトのリーダーである三上喜貴教授も、「日本のものづくり文化を輸出するためには、日本語はもっとユニバーサルになるべきだ」とおっしゃっています。

とはいっても、我々現場の教師は「平易な言語」などとは無縁の世界で生きてきたわけで、「ユニバーサルな言語」とさらりと言われても、何のことなのか、どう表現を直せばよいのかさっぱりわかりません。「わかりやすく平易な言葉を駆使して伝える能力」を、教員の基礎的素養として押しつけたとしても、簡単に教員の能力を高めることもできませんし、昨今の慌ただしい日常業務の中では、その種の研修に時間を割くことすらナンセンスだとお叱りをうけることでしょう。

ツイニングプログラムという、一つの国際連携教育を遂行する上で、否応なしに日本語学習途上の留学生に相対して教えていかなければなりません。ならば、この機会を積極的に「教師の伝える力」の向上の機会として一石二鳥の効果をもたらそうと取り組んできたのは、以上の

ような理由からです。

単純に私の経験を書きつづっただけの前著『はじめての集中講義物語』でしたが、おかげさまで各所から好評を得ました。当初の予定通り、集中講義に行かれる先生方にお読みいただき、「現地での集中講義の様子がイメージできた」などの感想もいただいています。

2008年11月に始めた集中講義の事前研修は、2010年12月までに、10回、延べ16名の先生方が受講してくださいました。回数を重ね、そして集中講義を経験された大勢の先生方との対話の中から、新たな気づきもたくさん得ることができました。それが今回、付録として掲載したTIPS集です。読んでいただくと、先生方の努力の様子が活き活きと伝わってくることでしょう。

本稿の取りまとめにあたり、実に大勢の皆様からお目通しいただいたり、ご助言をいただきました。特に、同僚のリー飯塚尚子先生には細部まで読み込んでいただき完成度を高めていただきました。また、コトモモ社のたけなみゆうこさんには、かわいらしいイラストを添えていただき、校正校閲も担当していただきました。関係されたすべての方に深く感謝いたします。

最後に、手に取って最後まで目を通していただいたあなたの心に何か小さな記憶が残ったとすれば、著者として至上の喜びです。

二〇一〇年　師走

上村　靖司

著者

上村 靖司（かみむら せいじ）

1966年生まれ。

長岡技術科学大学 機械系 准教授。

専門は雪氷工学。

著書に『仕事に役立つ微分・積分』（共著）、『防災辞典』（分担）などがある。

本書は 2011 年 1 月 21 日、長岡技術科学大学より UD Project の一冊として刊行されたものの復刊です。

はじめての集中講義物語２

2014 年 9 月 1 日　初版発行©

著　者　　上　村　康　司

発行者　　伊　藤　義　郎

発行所　　GIGAKU Press

(長岡技術科学大学出版会)

〒940-2188　新潟県長岡市上富岡町 1603-1

長岡技術科学大学内

電話　0258-47-9266

Joho-kiban@jcom.nagaokaut.ac.jp

Printted in Japan

ISBN978-4-907996-05-5

質の高い大学教育推進プログラム

UD に立脚した工学基礎教育の再構築 （UD プロジェクト）

TEL　：0258-47-9238
FAX　：0258-47-9050
E-mail：kokusai@jcom.nagaokaut.ac.jp

詳しい内容、最新情報はウェブサイトで

http://twinning.nagaokaut.ac.jp/ud/

長岡技術科学大学
Nagaoka University of Technology

GIGAKU Press